

【ポスター発表】

障がい者理解における比較判断

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

キーワード3つ: 比較, 視覚情報, 聴覚情報

1. 研究目的

福祉系の大学生は学年進行に伴い、障がい者に対して関心がよせられ、理解が深まるというような態度の変化がみられたが、障がい者に対する顕在的態度（たてまえ）と非顕在的態度（ほんね）とは一致することはなかった¹⁾。そして、小・中学生を対象に障がい者について説明する内容を選択肢で選ばせた場合、外見的説明よりも概念的説明の選択肢を選ぶことが多かった。また、障がい者について「ほんね」で説明する場合は、外見的説明の選択肢を選ぶことが多く、「たてまえ」で説明する場合は概念的説明の選択肢を選ぶことが多かった。これらのことから、障がい者について説明する場合、「ほんね」もしくは「たてまえ」の使い分けをする二面性があると指摘した²⁾。

そこで、障がい者についての理解がよく表れる障がい者に初めて出会った時に障がい者と分かった理由について検討することにした。なぜなら、「障がい者とは」と尋ねられた場合に描かれる障がい者のイメージについて検討した結果、障がい者のイメージは概念的な理解より、見てすぐ気づく外見的な理解に基づく場合が多いことが分かったからである。

2. 研究の視点および方法

1) 調査協力者 A福祉系大学の2019年度1年生116人、2年生137人、3年生120人、4年生130人、計503人を調査協力者とした。

2) 調査内容 障がい者に対する読書の有無、障がい者に関するテレビ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障がい者に対する態度、障がい者と考える状態、初めて障がい者と出会った時期とその人が障がい者とわかった理由、地域の小・中学生に障がい者について説明する内容、障がい者について「ほんね」で説明する内容、障がい者について「たてまえ」で説明する内容などとした。

3) 調査手順と調査用紙の回収 2・3・4年生は、年度初めのオリエンテーションの機会を利用して、1年生は、後期のオリエンテーションの機会を利用して、質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については、1年生は116人に配布し、106人から回収でき（回収率91.4%）、2年生は137人に配布し、128人から回収でき（回収率93.4%）、3年生は120人に配布し、109人から回収でき（回収率90.8%）、4年生は130人に配布し、111人から回収できた（回収率85.4%）。有効回答数は、1年生100人（有効回答率86.2%）、2年生114人（有効回答率83.2%）、3年生91人（有効回答率75.8%）、4年生108人（有効回答率83.1%）であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守し実施した。調査対象者には、研究の

趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮することを説明後、調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認を得た。

4. 研究結果

初めて障がい者に出会った時期については、1年生、2年生、3年生、4年生はいずれの学年も「小学生低学年」の時に会ったものが一番多く、次いで「保育園・幼稚園」「小学校高学年」の順で、いずれの学年もこれら3つの時期で9割近くを占めた。

初めて障がい者と出会ったときに障がい者と分かったのはなぜかという質問に対して回答された記述を「障がい代行」「外見・不自由」「交信関連」「逸脱行動」「違い」「説明」「居場所」に分類した。なお質問の意図に合致しないものは「その他」とした。複数の理由を回答している場合はそれぞれに分類した。1年生が一番多かったのは「外見・不自由」、次いで「居場所」「違い」の順であった。2年生は「居場所」「違い」「外見・不自由」の順、3年生は「外見・不自由」と「居場所」が一番多く、次いで「違い」の順で、4年生は「居場所」「説明」「違い」の順であった。

初めて障がい者に出会ったのが「小学生低学年」と回答した場合、障がい者と分かった理由としていずれの学年も「居場所」を挙げたものが一番多かった。「保育園・幼稚園」と回答した場合は、1年生と3年生は「外見・不自由」を挙げたものが一番多く、2年生と4年生は「説明」を挙げたものが一番多かった。「小学生高学年」と回答した場合は、1年生と2年生は「外見・不自由」と「居場所」、3年生は「外見・不自由」、4年生は「居場所」を挙げたものが一番多かった。

5. 考察

障がい者と分かった理由を分類した項目は、学生のみで見て判断している「障がい代行」「外見・不自由」「交信関連」「逸脱行動」「違い」「居場所」の視覚情報と、他者から聞いたり、障がい者が発出する音から判断している「逸脱行動」「説明」「居場所」の聴覚情報に分けられる。これらの分類項目は、障がい者を学生やその周辺の人と比較して判断する対人選択ともいえる。この比較は対人認知の過程で、障害の特性やその関連概念に障がい者の特徴をあてはめて、学生自身より劣っているとか、不幸な境遇におかれている、すなわち上で述べた協力者の目で見たと聞いたりした情報を学生または周りの人と異なっていることから障がい者と判断していると考えられる。外見的な理解とは理解する学生という当事者またはその周辺と障がい者との比較に基づいていると考えられる。

文献

- 1) 岡村綾子 (2015) 福祉系大学生の障がい者に対する理解について—非顕在的態度を中心に—. 金城大学紀要, 15, 19-30.
- 2) 岡村綾子 (2021) 障がい者の説明に見られる「ほんね」と「たてまえ」—福祉系大学生と非福祉系大学生の比較—. 金城大学紀要, 21, 43-57.